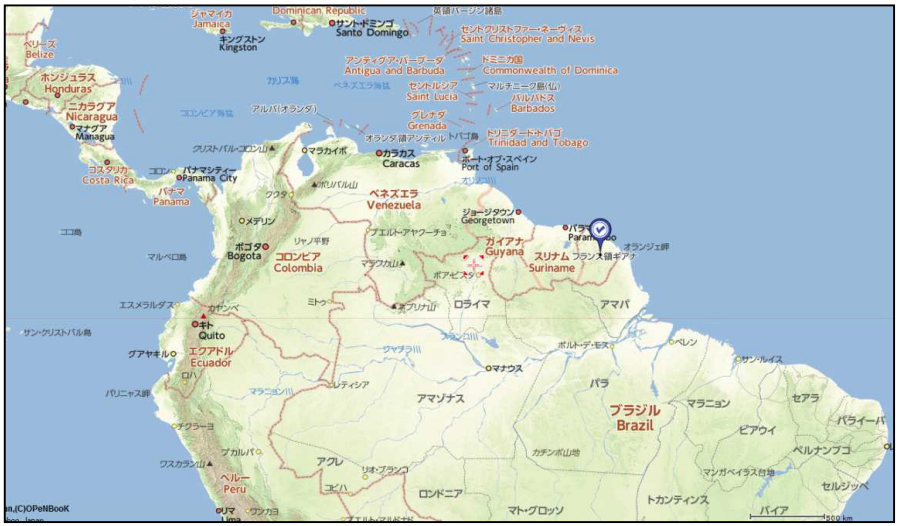
ジャングルでの出会い

1、はじめに

オニテナガエビの大型養殖技術については添付している「南米仏領ギアナにおけるオニテナガエビ（Ｍａｃｒｏｂｒａｃｈｉｕｍ　Ｒｏｓｅｎｎｂｅｒｇｉｉ）ふ化･育成事業について」にて述べている。
赴任した１９８５年より１９９０年１月に帰国までの現地ジャングルにおける生活で、貴重な出会いが有ったので
で書き綴ってみた。

まず地理並びにその環境についてお話ししよう。
養殖プロジェクトの現場である南米仏領ギアナ県庁所在地のカイエンヌは北緯０４度１３分４５秒、西経５２度５９分
２０秒で南米北東部に位置し、1946年にフランスの海外県となった。
面積は８３，５３４Ｋ㎡と北海道の面積に略等しい。



人口は１９８２年７３，０２２人、１９９０年には
１１４，６７８人と増加している。
民族は黒人と白人の混血であるクリオール系と
アフリカ系黒人が６６％、フランスからの入植者の
子孫１２％、インド人１２％、先住民インディオ約４％、
南アメリカの最多民族マルーン（逃亡奴隷の黒人の
子孫）、華人、ベトナム、ラオスの移住者（ミャオ族）
も少数ながらいる。

経済はもっぱらフランスに依存している。
主な輸出産業は漁業（エビ）が輸出の約７５％を
占め、続いて金、木材、ラム酒がある。
金は１８５８年から１９００年にゴールドラッシュが
起こり、２万人以上の人が金を求めてやってきて
いる。

1、はじめに2

赤道に近く静止軌道の打ち上げに適しているため、
１９６６年首都カイエンヌの北西部６０Ｋｍ程の所に
あるクールーにフランス国立宇宙センターの打ち上げ
場が設置され、ＥＵの宇宙開発に取り組んでいる。
我々のプロジェクトはカイエンヌより南西へ５０ｋｍ程
奥に入ったジャングルで、コンテ川に沿ったところにパートナーの会社が運営している牧場とオニテナガエビ養殖
の試験池が有る。

当時はまだ未開地で、当然電気・電話・水道等のインフラも手つかずのジャングルである。
気候は熱帯雨林気候で４月から6月、11月から2月の間は雨季、他の季節は乾季である。
蚊が多く発生し、蚊が媒体のマラリア、デング熱,そして破傷風の発症例が有ることも聞いた。
また、生息している注意しなければいけない動物として一番に挙げらえるのがジャガーそして毒蛇で８ｆｔ（約
２．５ｍ）ジャンプする”ブッシュマスター”で一時間以内に血清を打たないと死に至る危険な爬虫類、そして

カイマン、アナコンダ、節足動物ではタランチュラ（世界最大のルブロンオオツチグモ）、さそりも生息している。
蟻も多く生息し私とって注意しなければならない生き物でもある。
現地の建物は養殖場建設を行う我々の現地パートナーのメカニックショップと１ｋｍ程離れた所にパートナーの
牧童４名が住む宿舎と社長のバンガローが有る程度である。

１０名程のメカニック・重機のオペレーターは程５０ｋｍ離れている町カイエンヌよりワゴン車２台で通っている。
私はまず私および養殖場に携わる人の宿舎、並びに遅れていた養殖場建設に着手した。
そして赴任していた５年の間ふ化場建設、ポンプステーションの建設、自家発電並びに施設への配電工事、二
つのクリークをせき止め給水ダム建設並びに養殖池の建設と孵化、養殖事業に携わった。

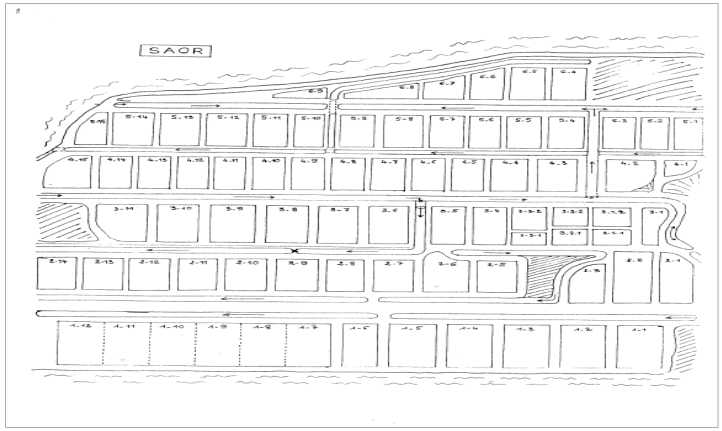
その間、多くのフランスの方々中南米の方々そしてそこに住む動植物の生き物たちと5年という年月に多くの
稔有る出会いが有った。

1、はじめに3

1985年赴任時の風景

1987年初頭の風景

1988年の写真が無いの養殖池図



2、仕事での出会い

そんな環境の中で一緒に仕事をしたり暮らした仲間たちは、フランス人パートナー一家でエビのパッカーを営む
ポール・マニヨン一家とその兄で牧場、建設会社、現地エビ漁業会社を営み養殖会社の社長ピエール・マニヨン
ご夫妻はプロジェクトの推進に経営の立場で一緒に仕事をさせていただき、また、私的にも大変お世話になった。
兄のピエールさんはフロンティアスピリット旺盛な方で今回のプロジェクトも１，０００Ｈａと話されていた。何時も目
を輝かせて大きい体全体で話をされ、人として魅力のある方であった。また、大変社交的な方で財政界に幅広く
通じたかたでもあった。

弟のポールさんはピエールさんとは少し違い中小企業の社長さんと言った感じの方で、早朝に出社しゲートに
立って従業員を迎えていた。彼のイメージは新品を揃えるのが嫌いで古いものを修理して使用するのが得意で
ピエールさんはそんなポールさんをケチと言うほどだが兄弟のバランスは素晴らしいものがある。
養殖場ではフランス人技術者初代チーフのピア・イヴォンさんは白内障の愛犬と養殖場に赴任、２年目に１年間
休職してオニテナガエビのバイオマスに関した論文かで博士となり復職、私と色んなことを議論できた方で忘れ
られない方である。

他にローレン・サルモン氏、女性のマリ・ジョ氏、ジャックリン・ソマー氏、そして私には悪さをするいたずらフランス
人研修生フィリッペと他の１名。ラオス難民のバラウ、一般作業のインド系ガイアナ人ナイポールと他１名、ハイチ
人の現地のハイチ人を束ねる文盲で長老のルディと豆料理が得意な食事係レネの出稼ぎファミリー５名、建設
会社のメカニックでチーフでパーツが無いジャングルに適したなんでも加工して修理、組み立てるプロでインド系
ガイアナ人ラメッシュと他１名、重機（ドラッグライン）オペレーターで素晴らしい技術の持ち主チーフのインド系
ガイアナ人デュキと他３名、左官、大工に関する全てを上手にこなすスーパー大工のセントルーシア人リガバ、
ジャングルについては何でも判るブッシュマン木材伐採専門のブラジル人ペドロ、牧童で危険なブラジル人2名
が主に出会った人たちである。

2、仕事での出会い2

右よりプエルトリコの養殖場のミッシェル博士、二番目ピア・イヴォン氏、
三番目ミッシェル夫人、左端はジャックリン氏

左前列二人目ペドロ、その左ラメッシュ、筆者、その三人目デュキ、右よりローレン、その後ろ小さく
映っているのがリガバ、ローレンの左はジル夫妻

3、トイレは何処

赴任して始めて養殖場建設現場を訪れた時、メカニックのインド系ガイアナ人ラメッシュに「トイレは何処」と聞いてみたら、「アリオカここの周りは全てトイレに使用しているんだ。ただ先に誰かが使用している所が有るから特に入りやすい場所は注意しなくてはな」と教えてくれた。

私は「ここにはトイレットペーパーの在庫はおいていないの」と問いかけたらラメッシュは「管理できないから在庫は置かない。ここではお尻をふくのは人それぞれで、ダンボールを破って使う人、新聞紙を使用する人、川の水（水洗）を使用する人、大き目の葉っぱを使用する人がいるんだ。大きい葉っぱの木はあの川沿いの右奥に有るんだ」との話に私は「うーんそうなのか」とうなずきながら不安も感じ
だってトイレへは藪や水辺へ行くわけだから当然蛇が頭をよぎった。
蛇は綺麗な水のある湿った場所を好むと聞いていたからである。

トイレに葉を使用した昔聞いた話を思い出してニタリとした。それは、葉を使用するときは葉が小さいと葉に穴をあけ中指を入れその中指でお尻を拭き、指をさした葉の部分で拭いた指を綺麗にするが、きれいにできないと心理的に指を振ってきれいにしようとする。指を振った時に周りの木の枝に指をぶつけ痛いとその指を咥えてしまう。最初から指をなめて綺麗にすればいいとオチが付ついた話である。

この様な時は色んな思いが頭を交差するものである。
私は最初にトイレ探しを始め川に張り出したほど良い木を見つけた。
その木にのぼり小さく張り出た枝に両腕と顎を乗せて用を足す。
実に気持ち良い場所で、もしジャガーが来たらどうしようか、川にはピラニア、カイマン、アナコンダもいるかもしれないし逃げるところが無いなど思い巡らしながら用を足すが、お気に入りのトイレであった。

４、ジャングルに住む決心

約束ではカイエンヌに住み約５０Ｋｍ離れたジャングルの養殖場並びに建設現場へ通うことになっていた。
数日通った時点で現場近くの牧場の宿舎に滞在しているハイチ人の数名も町へ降り、翌日上がってこず作業
に影響をきしたことで、牧場の宿舎近くにある社長のピエールさんのバンガローに住むことにした。
私が現場に住むことで従業員も宿舎に留まり仕事が進められた。

バンガローは養殖場より１ｋｍ程コンテ川下流の川岸に沿って作られた高床式で屋根と柱そして床が有り部屋は
柱にヤシの葉で低く区切られた３ＬＤＫでドアなどなく全体がみわたせる。
もちろん、電気・水道・トイレ・シャワー施設はない。

夜はガス灯の明かりで食事を作り食べるが壁が無いためにものすごい量の虫達が集まってくる。
昆虫採集には最適な場所できっと新種も多く発見できるかもしれないが、毎日の生活には苦しさがある。
食事を作るときも、食べるときもガス灯の明かりでかすかに見える程度にしても虫がやってくる。

食べるときはガス灯を消し月明かりの下で食べる。
最初は箸で虫を外していたが良く見えないのできっと虫も食べていたのだろう。
お腹が空いていて、その時は何を食べても美味しく感じ、食べ終わるとどっと疲れが出てくる。

食後はバンガローの前の川岸に作られた小さな壊れかけたボート用の桟橋にて、懐中電灯を片手に川へ降りて
水浴びをする。近くにワニや蛇がいないか懐中電灯を照らして確認しながら怖々水浴びをする。

床に置かれたベッドに蚊帳をかけて休む生活に、日本でキャンプ等の経験があるものの、きれいな月明かり
と異様な静けさのなかジャングルの動物たちの鳴き声や藪のざわめき、綺麗な虫の音の合唱にロマンチックな
気持ちには成れない。
何時も二槽の銃に弾を込め枕元に置き、何故か自然に流れる涙を感じつつ眠りについていた。

5、キツーイ歓迎行事

数か月が経過し、まだジャングル生活になれない時期である。
会社の仕事だけでなく、パートナーで有る養殖場プロジェクトの建設を担う会社の現場管理をも任されること
になる。数日後フランス人でも難しいことが日本人にできるわけがないという不信任と賃上げを掲げてのスト
ライキ。従業員やメカニックたち１０数名はカイエンヌへ降りてしまった。
ピエールさんは私に任せ動かない。

ここで弱さを見せれば私はここで終わるとの思いで、未経験の中クランクでエンジンを始動する第一次世界大戦
前に活躍したようなダンプや１０屯と２０屯ほどのブルドーザー・１０屯ほどのポクレンのオペレーションを教
わり一人で少しずつ池の建設作業を前へ進めていった。

一か月がたったころチーフオペレーターのデュキがジャングルへ上って来て黙って働き出した。
数日の間私の動きを見ていたのか全員が登ってきて仕事を始める。
給料は今まで通りの条件で良いので一緒に働くと言ってくれ感激のあまり胸が熱くなった。

まず重機のオペラーター達に自主性を持ってもらう為に池の高低を測定する方法を教えた。
一か月に３つの池を建設できればボーナスを支払うことで皆のモチベーションもあがり効果が表てきた。
昼はなぜ私がこの様な仕事をしなければと歯を食いしばりながら池つくりをし、夜は綺麗な夜空を眺めながら
涙した結果得た出会いに嬉しい涙があふれた素晴らしい洗礼だったのかもしれない。
この様な時は坂本九の上を向いて歩こうを口ずさみ元気づけらえれた歌の出会いもあった。

6、石器時代の狩りが目の前で

私が飼っている犬二匹が７・８０ｃｍ程のアグーチをジャングルより追い出し、水が張られた池へ追い込んだ。
それを見た従業員達１０名ほどが仕事止め各々棒を片手にワーワーワーワー言いながらアグーチを追う光景
はタイムスリップした何処かのどかな、対象はマンモスではないが漫画家園山俊二さんが描いたギャートルズの
世界がまさに目の前で繰り広げられた。

この漫画的な世界は、10分程でアグーチは不幸にも捕獲された。
皆で自然の恵みを得た喜びの中、ブラジルの奴隷料理のフェイジョアーダ風料理、現地ではＨＡＲＩＣＯ　ＲＯＵＧＥ
（赤いキドニービーンズ）と呼ばれこの度はアグーチの肉、玉ねぎとニンニクを油で炒め水を足して水に浸して
いた赤いキドニービーンズを入れ塩、胡椒で味付けした煮込み料理に変貌し楽しい酒の無い宴となった。

次の日社長のピールさんが「イサトシ昨日ネズミを食べたんだって」と話しかけられ、私は「ネズミではなく
アグーチを食べたんですよ」と答えたら、社長「それがネズミだよ」と言われ食べていけないものを食べてしまったと
びっくりした私に「ハハハ・・びっくりしたか。アグーチはネズミの仲間でこちらでは皆食べているから心配ない」と
言われ二人で大笑いした。

7、自然に生きている人にビックリ

養殖場の近くに宿舎を作ったのでハイチ人長老のルディ、調理人レネと彼の父の３名が住んだ。
私はバンガローの一人住まいが怖くなり、養殖場技術者用二階建ての宿舎が出来るまで彼らと一緒に住む
ことになる。

彼らは文盲であるが実に記憶が良いのに驚いた。
彼らは当然暦もないし、記録もしないが、何年・何月何日の出来事をまるで日記でも読むかの様にをすらすらと話す。
また、時間もそうで10時の休み時間、12時の昼休み、１６時の終業時間を太陽の位置で判るのかそう狂いがない
のに驚かされる。

「天二物を与えず」か、で私はと自分に問いかける。
1986年ころのオーストラリア映画でコミカルなクロッコダイルダンディの一コマ、ジャングルにアメリカから取材で
会いに来た女性記者へ太陽をみて何時だと言ったシーンをふと思いほほ笑んでしまった。
私には時計、暦が無い生活は怖いし、彼らみたいに優れた才能の一つもない。

8、ハイチ人長老ルディ、調理人レネと父３名との居候生活

宿舎は高床式の４Ｌで、壁など無い８畳ほどのリビングを南北に挟み４畳程の床と壁に隙間の多い板壁の部屋が二部屋ずつある。
私は西側の部屋で棒で押し上げて突っ張る板の窓が有り、顔を出すと斜め下にポンプステーションへの川からの水路が見える。宿舎の東側では養殖池の造成も行っている。

東西は壁はなく真ん中に板で作ったテーブルと板のベンチが二つと壁に棚を作り、鍋はアルミ鍋２個、ごはんや揚げ物が作れるダッチオーブン風の鍋１個、食器は透明のガラスの皿が6人分、大さじ、小さじ、フォークが６人分程置いている。

食糧類は米に調味料（塩、砂糖、胡椒）、食油、豆類はネズミに食べられないように壊れた冷蔵庫を横たえドアを上にして保管した。
東側に外に出る板で作った階段がある。
台所は外で板のテーブルが一個、その上にプロパンガス用コンロを一つ置き、屋根は無い。

食事は明るい内に準備し日没までに食べ終えて片付ける。
１８時頃から２０時位まで大量の蚊が血を吸いやすい動物を求めてやってくるのでその間部屋の蚊帳に包まれたベッドの上で月の明かりのなか寝そべる。

蚊が一斉に立ち去ったらリビングに出てきて月明かりの中でバナナ、マンゴウ等その日に現場で調達できた果物を食べて２時間程楽しく過ごし就寝。

朝は日の出と共に目が覚めるが、4時から６時までは大量の蚊が襲来するので動けない。
蚊達が唯一ジャングルで血を吸いやすい肌をしているのは我々人間で、蚊も必至なのであろうが、我々も刺されまいと防御行動をとる。
朝・夕の2時間は特に自然の営みを体で感じさせられるときである。

9、雨水の有り難さ

カイエンヌの町ではミネラルウオーターは普通に販売されているが、ジャングルの生活に馴染む為に皆と
同じく生活を進めた。
飲み水はスコールが来ると雨どいの下にドラムを置き雨水をため炊事用とする。
飲料用はペットボトルを皆で１０本程用意し、雨が来るとわかると古い水を捨て新しい雨水と入れ替える。
この作業は誰となく気づいた者が行うと言う暗黙の決め事である。

ある暑い昼間に現場を回っているとき、のどがくっ付くように渇いた。水の手持ちもなく宿舎まで帰り着きそうに
も無いので、川に顔を付けコーラ色した川の水をがぶ飲みしてもうろうとした身に危険を感じた出来事で、
水の大事さを身をもって知らされた。

シャワーは普段川で行うが、スコールが来ると雨どいの下で大量の雨水に打たれ、口をパクパクして水を得た
魚の様に爽やかな気分になれる。
雨は無常でもあるが生きていくうえ大変貴重で有り難さを体感できる出会いでもある。

10、共同トイレ

宿舎にはトイレはなく、前に”トイレは何処”でお話した通りである。
ある時私が在庫していたトイレットペパーをきらし、レネの父にトイレットペーパー無いかと聞いたら、段ボール箱を持ってきて、レネの父は「パトロン、この表面を剥ぎ良くもんで使うと良いよ」と渡してくれた。
彼らは私の事をパトロンと呼んだ。
ジャングル生活に物が有ると思うな有るものを工夫しろとまた一つ教わった。

11、日替わりメニューの宿舎キャンティーン

明るい時間に食事を作り、明るい時間に食べ終えなければ蚊の餌食になる。
料理担当のレネは昼食の後に夕食のための豆を水につけ4時半ごろから炊事に入る。
長粒種のインディカ米をダッチオーブン風の鍋に入れ雨水で洗い必要な目安まで雨水を注ぎ食油を加えて炊く。

おかづは川魚が主体で簡単に取れるエリトリヌス科のホーリー、カラシン科のメティニスみたいな魚が多い。
日本では熱帯魚として重宝されている魚だと思う。
魚を鱗、内臓、えらをとり魚の小骨を切るため包丁を入れる。
小麦粉、塩コショウをまぶし食油でからりと二度揚げる。
ワンプレートディッシュだから皿に各々ご飯をつぎ今日の魚を二・三匹ご飯の上に取り塩味の煮豆汁をかけて
食べる。

最初は珍しくよく食べていたが、一か月たって見たら、朝・昼・夕食の献立の違いはご飯にのせる今日の魚の
違いだけでご飯、豆の煮汁は全く一緒である。
時には芋の種類はわからないがこんにゃく芋みたいな直径１５ｃｍほどの大きさのダシンと呼ばれる芋を四つ
切にして塩ゆでにしたり、またキャッサバの根をきれいに皮をむいてダシンと同じように塩味で煮て食べさせて
くれた。

食用バナナを油で揚げたのも甘味がありなかなか美味しくてよく食べた。
ホウレンソウの原種と聞いたが、それを油でいためて豆ごはんに添えてくれたり、大変気を使ってくれている。
しかし、肉らしいものは無くいささか苦しい。

特別に肉類が欲しくなり買ってきてもらったら豚の尻尾の塩漬け。
冷蔵庫の無い生活、塩漬けは当然の選択に違いない。
今まで食べていた豆の他レンズ豆、ガルバンゾも買ってきてくれた。

さそっく豚の尻尾の塩漬けを使ったフェジョアーダ風アリコルージュの料理となった。
豚の尻尾の塩漬けは食べたことが無かったので大変興味があり、ご飯と豆には違いは無いが材料に新鮮味
がありありがたく頂いた。
その後の献立の変化は今日の魚と今日の豆と増えた。
居候の身で皆に贅沢を言って迷惑だったのかもしれない。

12、食糧調達

食糧の調達は長老ルディ、料理担当のレネとお父さんがやってくれる。
魚は豊富で釣ってもすぐ食事分は釣れる。
作業現場近くの水溜りに結構魚がいるのでその水に入り脚で水を撹き底の泥を巻き上げ濁らせると、
魚はえらに泥を詰まらるのか水面に浮いてくる。

それをマシェッテ（蛮刀）で頭をたたいてひっくり返ったところを手掴みしてとるがすぐ10匹くらいになる。
野菜は芋のダシン、キャッサバ、南蛮を植える。
伐採した後野焼するが最初に目をだしてくるのが
ホウレンソウの原種と言われるもので、野焼の後収穫できる。
果物は豊富で養殖場の周りにはマンゴウ、パパイヤ、マラクジャ、グワバ、ヤシ、バナナ、パイナップルが栽培され

自由に取って食べて良いものでお金はかからない。
電気は無く生ものの保存はできないので、常温
保存の可能な食品を町から購入し、生ものは
食べるだけ収穫すれば良い。

ブラジル人木こりペドロと陸亀を取りについていった。
ジャングルの中を歩いていく時、目印に手で小枝を
折りながら進む。

亀を捕まえるとつるで四つにくくり仰向けにして
道横に於き、また枝を折って目印にする。
帰りにはちゃんと置いた亀を拾い帰れるのには
何か不思議に感じるものが有った。

フライにして食べた魚たち

12、食糧調達2

皆通るとき同じ様な目印をするのによく自分のだ
とわかるものできっと枝を何時折ったかで判断しているのだろう
と勝手に想像した。

帰ってアリコルージュの亀料理を頂いたが二度と食べようとは思わなかった。
ここに住む人にとって大事なタンパク源なので私の思いは贅沢なのかもしれない。

13、最初の蚊からのプレゼント

居候生活初めて数か月が経過したころ、夕方熱がでて立っておれなくなった。
同居のレネのお父さんがジャングルより生姜の原生みたいな植物の葉っぱをとって来て、ジャングルの生姜で
解熱に良いと言って煎じて飲ませてくれた。
翌日も熱は下がらなかった。

現場を離れる訳にはいかず現場へ行っては帰ってベッドで休み、煎じてくれた生姜もどきの湯を飲んで数日過
ごした。
３２℃ほどの気温の中、寒気がひどくどうも我慢できなくなり毛布を体に巻いて自分で車を運転して５０ｋｍ程離
れたカイエンヌの町へやっとの思いでたどり着いた。

現地社長ピエールさんはすぐ市内のパスツール研究所だったと思うが連れて行ってくれた。
血液検査を受けすぐにマラリヤと判明しその足で病院へ入院。
血尿が出ていて担当医と社長の会話で「今夜が峠」との話しが聞こえた。

何故か気持ちは落ち着き何も考えず澄んでいた。
目の前をきつねうどんとおにぎりがすーと通るのが見えた。
翌朝、ピエールさんと担当医のにっこりした顔が目に入り、ピエールさんは「イサトシもう大丈夫」といってくれた。
あー助かったのだと笑顔を返した。

驚きはその日の朝食で、内容は病人用ではなく普通の食事が出された。
身体は薬の副作用で水の他何も受け付けない。
たとえヨーグルトでも食べるとすぐに吐いてしまう。
そんな状況であっても食事は普通食で、日本人の私には理解できなかった。

１０日程入院し全快したのでジャングルの宿舎へ戻った。
峠の晩に見たきつねうどんとおにぎりはきっと私の最後の晩餐だと思っている。

今まで仏領ギアナにてデング熱は聞いていたがマラリヤの発病について最近は無いと言われていた。
パスツール研究所からなのか現場の池の方ではなく、住居より森へ向けて消毒が行われた。
同時に従業員全員の血液検査が行われ、予防薬は無いと聞いていたが、予防として錠剤が渡された。

14、言葉の不一致

池の水を２５ＣＭほど落としたくて、ハイチ人長老のルディとレネのお父さんに「池の排水口の板を一枚外して欲しい」とお願したら、快く「はい、パトロン」と答えてすぐに行動してくれた。
分かってくれたのだと信じ、一時間ほどたって池へ行ってみると板が三枚はずされていたので慌てて板をはめ戻した。
言葉が通じていなかったことに原因があり、以後必ず現場へ行って話し確認するようになった。
これも彼らに教えられた事である

15、蚊の舞

蚊が舞うのは特に夕暮れの６時頃から８時頃と夜明けの４時頃から６時頃の２回で、決まった時間にやって来て決まった時間に帰っていく。
その数たるや言葉では言い表されない。

体内時計でも有るのか解らないが、その習性については調べたことはない。
一斉に出てきて一斉にいなくなるのはかなりリーダーシップが取れる蚊が居るのか、見事なものである。
夕暮れ時に、家の外に置き忘れたものを取りに半袖のまま外へ出た途端に蚊に襲われ、血の気が下がり鳥肌が立ち寒気が走ったので急ぎ家に駆けこむ。
以後絶対にその時間帯の外出は控える様になった。

その時間帯に池でトラブルが発生したときは水の中に留まり、水の中に顔を出し入れして呼吸を保ち蚊が立ち去るのを待つ。
ジャングルの蚊たちにとって肌に深い毛が無く柔らかい人間は最適な食事処であるのかもしれない。
動物たちは剛毛に包まれ肌も厚いので、蚊にとっては助走してお尻を上げて突進しなければ食事には有りつけない。

人はその勢いで無数に襲われると血の気が引き、鳥肌が立ちそして寒気が走るのは当然で、動物は進化と共に肌を守る術ができている様に思える。
人はそれが無いので自分で蚊より身を守るには物を活用するほかない。

近くに（５ｋｍ程離れている）に住んでいるフランス人家族がジャガーを仕留めたとの情報を聞き訪問した。
その家族は牛の放牧の他たくさんの鶏も飼っており、その中に首から頭にかけて羽が無い鶏がいた。
「病気なの」と尋ねたらお近所さんは「カリオカと言う品種で、暑いので羽がなくなるが病気ではないよ」と話してくれた。
これも彼らなりの気温に対する適応かと単純に納得。
ただ、かれらの蚊への対応はどうなのか疑問は残った。

私を呼ぶのに時に「カリオカ」と呼ばれていたので、頭の禿げた鶏の品種がカリオカだから何となくコミカルな記憶である。

16、映画ズール戦争の場面を思い起こす

測量用にブラジル人木こりペドロが直径４～５センチメートルで３メートルほどのまっすぐな雑木を数百本切り出す。
我々が測量時に計測したライン上に棒を刺し
ビニールテープで白いテープの目印と高低の
黄色いテープの印をつける。

左はブラジル人木こりのペドロそしてその手伝い

ペドロとその手伝いが棒を持って歩く姿を見て、
1970年前後に見たイギリス映画を思い出した。
その映画は槍と楯が主な武器のズール王国が
最新の武器を持ったイギリス軍と戦うズール
戦争。
統率された兵力に勝るズールがイギリス軍を破る
と言う内容。

その場面に槍を持って南アの草原を歩ている場面
と重なって「ズール、ズール」と叫んでいた自分が
有った。

映画の結末はズール軍に取り囲まれて砦に
とどまった少数のイギリス軍の勇敢を湛え、ズール軍は軍を
退き、このイギリス軍は英雄に湛えられたと言うストーリーと記憶している。
イギリス映画だから負けたままの映画を作るわけがないと思う。

17、オッパイに噛みつく魚

現地社長ピエールさんは「こちらのプロペラ機には
ロープと釣り道具が積んでんだ」と。
「プロペラ機が故障したら、ジャングルの木の上に
ふんわりと不時着し、ロープを伝っておりる。
救助を待つ間魚を釣り飢えをしのぐんだ」と話して
くれたことが有った。

どうもここジャングルは魚種を選ばなければ釣り
道具など必要ない。
ある日給水カナルに飛び込んだところ、サヨリ
みたいな魚がびっくりして飛び跳ね、土手に突き
刺さった魚もいれば道路に飛び出してピョンピョン
はねている魚もいる。

飛び込んだ給水カナル

面白くなって給水カナルを歩いたら、ジャンプも見られたが今度は私の左右のオッパイを餌と思い襲ってきた。
チックとしたので見てみたら血がにじんでいたので　　すぐに私も魚と一緒に道路へ飛び出した。
オッパイが食いちぎられるところだった。危ない！危ない！
やはり釣り道具が必要だ。

18、ジャングルの昆虫の小さな王者？

蟻の凄さに驚くし私にとって怖い昆虫の一つである。
私が裸足の生活になった理由も蟻によるものだ。

赴任してしばらくは長靴を使用して池の巡回、工事関係の見回り打ち合わせ等行っていた。
一日少なくても一回は池の周りや草の中の蟻塚にうっかりして足を踏み入れてしまう。
すぐに凄まじい蟻の兵隊が足元から駆け上ってこれでもかと蟻酸入りの槍で刺していくのでたまらない。

そのまま池や給水路へ飛び込み蟻の兵隊から逃れる。
そのたびに長靴に水が入り歩き辛くなるため長靴を脱ぎその場に於いて裸足で仕事を進めていく。
いつの間にか裸足の生活になってしまった。
ジャングルのあらゆる場所に蟻は見かけられその種類と数は検討がつかない。

１９８８年のある日給水ダムの堤防が大雨のために決壊、養殖池半分程が浸水した。
浮いている枯れ木や浮遊物にはビッシリと蟻が乗っている。
その光景を見ると、地球に何があっても生き残るのは蟻かもしれないと思ってしまう。
私にとっては怖い存在である。

19、毒蛇"ブッシュマスター"の脅威

私がブルトーザーのオペレーターと共に造成工事を行っていた時、突然ブッシュマスターがブルトーザー
目がけて飛びかかってきた。
私が初めて見たブッシュマスターの姿で元々蛇が大っ嫌いな私は鳥肌が立った。
これがブッシュマスターかと目に焼き付けた。

それから数か月経った５月のある日、同居人のハイチ人長老のルディが私の所へ蛇に噛まれたと二匹の
ブッシュマスターをぶら下げてやって来た。
私はとっさに一時間以内に血清を打たないと死に至ると言われたことが頭を過る。
その二匹の蛇をトラックの荷台に積み、長老の太ももを紐で堅く縛り急ぎ５０ｋｍ先の公立病院へ向かった。
車で一時間の道のりである。

病院では医師が蛇を確認した後に処置が施され１０日間の入院となった。
すぐに血清を打つ処置が有るから噛んだ蛇を捕まえ病院へ持参しなければ血清の処置ができないのだろう。
蛇嫌いな私には噛んだ蛇を捕まえることは出来そうもない。
でもそうしないと死に至るとするとどうするだろうと思うと怖くなる。

医師より「次回蛇に噛まれた時は口内に傷が無かったら患部より口で毒を吸い取るか
もしくは市販されている毒の吸い取り器で毒を吸い出して冷やしながら病院へつれて来なさい」

「あなたが施した患部より心臓に近いところを縛る処置は血が流れず足が壊死するので決して縛って
はいけない」と矢継ぎ早に注意を受けた。
日本ではマムシに噛まれたら噛まれた傷口より心臓に近い部分を紐で縛り病院へ行くのが一般的な
処置と思っていた。

医師が注意した内容の一つで口で毒を吸い出す方法は大変リスクが高く私には受け入れられない。
もう一つの方法で市販されている毒吸い取り器は常備しておくことにした。
対処方法は国・地域により変わるものだ。

19、毒蛇"ブッシュマスター"の脅威2

また、社長のピエールさんより実際に起きた事なのでと言って話してくれた。
三人の男の兄弟が相次いで亡くなった事件が有り、究明の結果その死因は最初に亡くなった人はブーツの上からブッシュマスターに噛まれ亡くなり、後の二人は破傷風にかかり亡くなった。

その二人の共通した出来事は最初に亡くなった人のブーツを履いていたことが判り、ブーツを調べたらブッシュマスターの歯が刺さっており、ブーツを履いた時にその歯で足が傷つき破傷風にかかり亡くなった事が判明したんだと。

だから靴を履くときは良く靴の中を調べて履きなさいと言ってくれた。
あり得る話だと聞き入った。
確かにブッシュマスターの歯はさておき、サソリやら毒虫が入っている可能性が有るので注意は必要だ。

20、幹線道路に大きなタイヤ

カイエンヌの町から帰る幹線道路で、道路の真ん中に大きなタイヤの様なものと近くに３人ほどの人がみえた。
何があったのかと速度を落としてゆっくりと進むと、そのタイヤと思われた物体が動いた様に見えた。
だんだん近づくと、それはタイヤではなく３ｍを越しそうな大きなアナコンダである。

蛇が大嫌いな私にとって一瞬きゅんと固まってしまいその場から離れたかった。
でも如何するのか知りたかったので聞くと捕まえて売るのだと言う。
確かにフランス人はジビエ料理(フランス語でＧＩＢＩＥＲ）を好む。
アナコンダをフィレにして料理されると聞いたことが有るがけっして食べたいとは思はない。

あまり大きくないアナコンダが生きたまま袋入れられベンツのトランクに積まれたのを見たことが有るが
これほど大きいのはどうの様に捕獲し運ぶのだろうか。
疑問のままその場を後にした。

21、さすが中南米昆虫の大移動

中南米は昆虫の動きについてもスケールが大きい。
最初の遭遇はモンシロチョウの仲間と思われるが、養殖場の横を流れるコンテ川に沿って西から東へ見渡す
限りびっくりするほどの数の蝶が舞いながら移動する。

また、驚かされたのはキアゲハチョウと思われるがモンシロチョウと同じく川に沿って西から東へ大移動する。
この光景は蝶の生命の力強さと大移動の自然の神秘さに一瞬茫然としてしまう。
北米でモナルカ蝶が北米の寒さを避けメキシコで越冬するために３，０００Ｋｍ以上を大移動することは知られ
ているが、その生態と同じ過酷に生命を維持しているのかと感動を覚える。

別の昆虫の大移動だが、それはバッタであった。
この数もすごいが被害もある。
バッタは蝶の移動とは逆の東から西に沿ってやって来た。

養殖場に隣接している牧場を埋め尽くしたと言っても過言ではないが、バッタが通り過ぎた所は葉が食べられ
無くなってしまった。
荒れ野原の悲惨な状況にバッタがなす自然の凄さにある面怖ささえ覚える。
自然の未知に遭遇した出来事であった。

22、毒蛾パピヨンの大発生

南米大陸の昆虫の繁殖率の凄さと脅威の出会いである。
”パピヨン”の名はスティーブ・マックイ-ン主演のアメリカ映画が有名で私も何度か見た映画だ。

胸に蝶の刺青が有るので”パピヨン”と呼ばれた男が無実を唱えながら終身刑で仏領ギアナクールー沖に位置するデビルズ島（悪魔島）に投獄される。

その島より脱走し、スリナム、ガイアナを経てベネズエラへ逃亡し後にベネズエラの市民権を得ると言うストーリーだったと思うが、毒蛾パピヨンが大発生した場所はそのデビルズ島へ渡しが出るクールーの町の海辺の林で有ると言われたのでおかしくもある。

クールーより渡しでデビルズ島へ
見える島がデビルズ島

これが６０ｋｍ程も離れたカイエンヌにも飛来し住民の多くが被害にあった。
この蛾の鱗粉がエヤコンや車のファンなどから入り、それを吸うことでアレルギーが出て体中に強烈な発疹、かゆみが有り、そのすごさはやはり大陸級である。

保健所からはその処置としてサソリ、タランチュラに刺された時の処置同様ライムを焼いて患部に塗ると効果的と伝えているがかゆくて寝れない。
それは一か月以上悩まされた。

ある人はあまりにもお尻がかゆいので台所のコンロでお尻をあっためると気持ちが良いと言っていたが、ちょっとしたはずみでコンロに尻もちをつき軽いやけどを負ったが、かゆいよりやけどの痛みの方が良いと言ったほどにかゆみはすごかった。
桁外れの出来事ばかりである。

23、蚤のジャンプ力

私は成犬の雄マセリノ、雌の名は何故かジャンゴそしてパロマの三匹と住んでいた。
何と言っても蚤の繁殖の凄さにも驚かされる。

部屋の床は一面蚤が我が物顔で飛び跳ねているのがわかる。
そこで判ったことは蚤は３０ｃｍの高さのベッドへは登れないことである。
私が寝るときは、入口で草履をポンポンと投げ、同時にホップ・ステップ・ジャンプとベッドへ上げる。
蚤が私の足に付かない内にベッドへ上がるのがコツだ。
蚤の駆除も追いつかない繁殖力で、電気が通り掃除機が使えると蚤を毎日掃除機で吸い取り、蚤との戦いは
終わった。
蚤がベッドの高さまで来れないという大発見をした。

24、就寝時ネズミの訪問

ジャングルのネズミは町のネズミと違い菌が少なく安全と現地で聞いた覚えがある。
夜寝ていて私の体の上を動くものがいた。
それはネズミと気づき、私の胸から右腕へ移動し手の指へと向かった。
そして私の人差し指と中指をかじり始めたところで振り落とした。

甘いものを食べた匂いが指に残っていたのだろう。
昔、日本で赤ちゃんが口や鼻をネズミにかじられたとのニュースを聞いたことが有る。
私が実際に体験するとは思いもしなかった。
それからは石鹸で必要以上に手や顔を洗って寝床に付く様になった。

25、技術者住宅

全ての設計図は社長の弟で海エビのパッカー社長
ポールさんが作るが、作ると言ってもメモ用紙に
構想を描いてくる。それを基に現場で打ち合わせて
工事を進める。

技術者住宅は１階にシャワー・トイレ付１ＬＤＫを
２部屋と２階には共同大リビングロームに部屋が
３部屋とキッチン、シャワー・トイレ付の建物を作る
ことになった。

セントルーシア人大工兼左官および何でも屋リガバ
とブラジル人木こり兼何でも屋ペドロが打ち合わせ
整地後枠取りをしてセメントで基礎を作り、柱の
丸太を切り出し柱の準備する。

カイエンヌから中古の床用と壁用の板、そして中古
の屋根用トタンが送られてくる。
基礎が出来上がると丸太を組み、古い板で床と壁、
屋根は古いトタンで家を建てていく。

新築でも使用しているのは使用済みの物ばかり、
でも、セントルーシア人の大工リガバは凄腕でがっしり
とした二階建てをメモ用紙の図案の通り
作り上げた。

問題は使用済みトタン屋根よりの雨漏れがひどく
夜寝ていて雨が降ると雨が当たらないようベッド
の移動を繰り返しながら眠った。

ポールさんと技術者住宅建設打ち合わせ

完成後の技術者住宅

26、チーフ　ピア・イヴォンのフレンチマンの定義

ピア・イヴォンはナチュラリストで世界的な自然保護団体に加盟していた。
養殖池を作るためのジャングル伐採にも意見が出されたり、イルカ・クジラについても議論した人である。
また、日本人の割り箸を作るために一部アマゾンの森林伐採しているがなぜ一度で捨てるなどなども。
「日本の文化」だと反論はしたけれど彼の言っていることも解る。

そんな中、「フレンチマンは・・・」と言ったところで、ピア・イヴォンは「フレンチマンはフランスでもパリで高学力を受けた人たちの事で、他の人たちの事はフレンチーと言うのだ」とまた、「フレンチーは海外へどんどん出て行くし英語もしゃべれる」と。
「フーン　そうなのか・・・　まーピア・イヴォンのフレンチマンの定義か」と。

27、ごきぶり事件

私が赴任後２年目よりフランス人技術者チーフのピア・イヴォン、女性技術者ジャックリン、研修生フィリッペ
他１名が入社し、技術者住宅へ入居した。
２階の右端の部屋に私が、大きな部屋に研修生フィリッペと他１名、そして１階の右の部屋に女性技術者ジャック
リン、左端の部屋にチーフのピア・イヴォンが住む生活が始まった。

蚤の他にゴキブリが部屋に見られるようになり、ある夜殺虫剤を床一面に噴霧した。
しばらくして一階のジャックリンの驚いた叫び声がしたので降りて行ったらジャックリンはすごい剣幕で怒った。

「サバパ　イサトシ・・・・・・・・！」とイサトシお前は馬鹿か・・・・・・！あまりの早さに馬鹿かしか覚えがない。
部屋はベッドの上から床一面に天井の隙間から私に殺虫剤を浴びせられたゴキブリが降ってきた。
ゴキブリの雨だったようだ
丁重に誤り、降ったゴキブリをきれいに掃除して自分の部屋に戻るがゴキブリの数とジャックリンの怒った顔
に中々眠れなかったゴキブリ事件であった。

28、研修生二人のペット

フィリッペと１名の研修生はある日養殖場内でアナコンダの子供１メートル強を捕獲し、木でケージを作り飼い始めた。

よりによってなんで蛇をペットにするのか理解に苦しんだが、彼らは「帰るときはジャングルに返せばいい」と言う理由か、休み時間にその子供のアナコンダを時々肩に掛けたりしていた。

餌の捕獲は天井の梁の丸太を歩くネズミやコウモリを鉄砲で撃ちそれを与えていた。
元々雨漏りが激しい屋根だが日々雨漏りがひどくんるので、フィリッペに家の中で鉄砲撃つのは止めるよう注意したが私がいない時に行っていたのかもしれない。
トタン屋根はタールで穴の補修をし雨漏りはしのげた。

29、ペットのアナコンダは何処へ

夜カイエンヌから住宅に帰ると、当然全体が真っ暗で月明かりで回りが判る程度の明るさはある。。
二階へ行くとフィリッペが「イサトシ　夕飯作って有るので食べたら」と珍しく言ってくれた。
ピエールさんの家で夕飯は頂きお腹は一杯だったが、せっかくだったので頂こうと月明かりでお皿に盛られた
料理を見ると揚げ物とは判った。

一つ口に入れて噛むけど堅い、フィリッペに「何を揚げたの」と聞くと「魚だよ」と返ってくる。
再度噛むけどどうも食べれない。
そうこうしているとフィリッペ達のくすくすと言う笑いが聞こえ意地悪されたことに気づいた。
再度「堅くて噛めないけど何だ」を尋ねると笑いながら「アナコンダ！」と言う返答が返ってきてびっくし突然吐き気
がした。

蛇が嫌いなのと彼らが飼っている蛇が頭を過った。
私に不満がありこの様な態度で表したのかもしれない。
次の日ケージには蛇はいなかった。

30、待望の大型発電機

待ちに待った発電機が運ばれてきた。
コンテ川より川水を汲み上げるポンプステーション
に据え付けるので準備はしていた。

ブラジル人木こりペドロが丸太を伐採やぐらを組み、
チェーンブロック４個を使い車から降ろしポンプ
ステーションへ少しづつチエーンブロックでの移動、
設置に半日はかかった。

メカニックチーフのラメッシュ、木こりのペドロ、
大工のリガバ他総勢１０人程かかっての一大作業
であった。
クレーンが有れば多分１時間で車から降ろし設置
が終了できるのだろう。

ジャングルに物が有ると思うな有るものを工夫して
進めろとの社長ピエールさんのお言葉。
それから数日後一部配線も終え待望の電気が灯り、

ジャングルの文明開化の日が訪れた。
でも、数か月は発電機を動かすのは川の水を
養殖地へ汲み上げる満潮の時間帯だけで、月明かりで夜を
過ごす日も多かった。

ポンプステーションに据え付けた発電機（左）

31、夜のジャングルツアー

一週間に一回程業務と買い物の為にカイエンヌへ出かけ帰りは決まって夜道を帰ることになる。
激しいスコールが有ったかはカイエンヌにいるときは判らない。
夜道を走り幹線道路から養殖場への道路に入ると道路のくぼみに水がたまっていてスコールが過ぎたことが
分かる。

これからジャングルナイトツアーが始まる。
道路のくぼみにタイヤがはまらない様に、またスリップしてジャングルに突っ込まない為にまさにドライブテク
ニックが要求される。
車には何時もスコップを積んでいる。道路のくぼみにはまったら、夜道で石や木を拾いタイヤの下に敷き
詰め脱出する。

幹線道路から養殖場への道を少し走り下り坂を下ると道路の両側のクリークが増水して、道路は１０Ｍ程に
わたり３０ｃｍ位浸水している
ギアをローにシフトしゆっくりと車を前へ進める。すると、ヘッドライトに驚いてか魚が飛び跳ねボンネットの上
をピョンピョンと数匹が入れ替わりながら切れることなく飛び跳ねている。
しばらくは見とれてしまう。

斜め前に赤く目が光る。ワニが泳ぎながら通り過ぎる。
数十秒間のショータイムだが私は何もかも忘れこの世界に入り込んでいた。
クリークを渡ると登坂になり現実に引き戻される。
私の好きな癒される自然が織りなすナイトショーである。

32、バナナと節足動物

ブラジル人木こりペドロが良くバナナの大きい房を持ってきて鴨居にブラ下げてくれる。
すぐ食べ頃になるので一日２・３本食べる。
バナナの房は節足動物にとって住み心地が良いのかもしれない。

持ってきてくれるバナナの房の中でサソリを三回程見つけた。
すぐ棒で落しバケツをかぶせて殺虫剤をかけ殺していた。
サソリやタランチュラに刺されたら患部は腫れるが死ぬことはない。

ライムを輪切りにしてコンロで焼き、患部に塗り湿布後病院へ行けば良くなると現地で教えられた。
ライムは近くの牧場に大きな木が有り何時も手元に置いている。
それまではサソリ、タランチュラに刺されたら死に至ると信じていた。

33、食べ放題

ここへ来て良いこともある。
空気が綺麗で呼吸するのも忘れるくらいと表現
できるのと夜空がとても綺麗なのは言うまでもない。

パートナーの牧場にはバナナも豊富で、果物として
のバナナに料理用バナナやマンゴー、パパイヤ、
パインアップル、マラクジャ、グワバ、アボガド、
ライム等トロピカルフルーツとココナッツが収穫できる。

ここで働いている者は自由に取ってたべられる
完熟フルーツの贅沢な食べ方である。
皆で寛ぐときピア・イヴォンがラム酒で採りたての
フルーツを使いラムパンチを作って飲ませてくれた。
疲れが吹き飛ぶほど美味しく感じた。

日本国籍ブッシュマン　ヤシの実をとる

34、牛達も食べ放題

牧場に隣接し木を伐採した後の傾斜地に食用
バナナを植えることになった。

社長ピエールさんが１，０００本のバナナの苗を
届けてくれたので皆で喜んで植えた。
ちょうど若葉が成長してきたころ、どうして牛達が
バナナの若葉を知ったのか数十頭の牛達が来て
美味しそうにはみ出した。

バナナの葉を無制限食べ放題状態である。
皆で苦労して植えたバナナも壊滅させるのに
そう日数はかからなかった。

新芽を求める牛達

35、稀に牛肉の食べ放題

牧場で牛が大きなけがをしたら牧童がブラジル人木こりペドロを呼びに来る。
彼は普通の料理用包丁を持ってメカニックが運転するトラクターで牧童の馬について現場へ出かけ、怪我した牛を殺し解体してトラクターで運びブロックにして皆に分ける。

病気や蛇に噛まれて動けなくなった牛は殺して埋けなければならないが、落下して怪我した牛は食べて良いことになっている。
何時も移動して牧草を食んでいる牛なので非常に硬い。
圧力ガマで良く煮た上で食べるがこの食べ放題は嬉しくないが命を頂いたのでご馳走様。

36、現地の人の話を聞く

コンテ川で行水するのに一番気になるのはピラニアである。
釣りに行った者がピラニアを釣りあげていたのでピラニアがいることは判ったが、近くで現地の子供が水浴びしている。
危なくないのか聞いたところここのピラニアは襲ったりはしないので水浴びしても大丈夫と教えてくれた。

自分も恐る恐る一緒に水浴びしたが問題なかった。
帰ってメカニックのラメッシュに聞いた話をしたら、たとえば水浴びしたかったらそこに住んでいる人が水浴びしているのを確認してから水浴びをすることが大事で、ピラニアも襲う物とそうでないのがいるらしいから。
まずはこの場所は何が危険なのか注意点を聞くのが安全の秘訣かもしれない。

37、犬猿の犠牲

業務でクールーの町に出かけた帰りにガソリンスタンドへ立ち寄った。
隣はジビエ料理の店とスタンドのおやじさんが話してくれた矢先、近くで犬の吠える声がしたかと思いきや
サルが私の右足にしがみ付きひざ下に必死に噛みついた。かなり痛みが走り出血した。

おやじさんはジビエ料理屋から逃げた猿だからすぐ病院へ行くように言われカイエンヌの病院へ急いだ。
救急治療室に入り若い先生が破傷風の問題が有るので傷口を化膿させるとの説明だったと思うが、先生は
傷口に蒸留水の様なものをかけガーゼそして包帯で処置は終わった。

一週間後との事で薬もなく返された。
数日後熱がでてリンパは腫れ、足は色が変わるほど腫れたので、社長のピエールさんに相談したら院長先生
に電話してくれた。

院長先生はすぐ来るよう言われ、院長先生に診ていただくと足の切断の一歩前で間に合ってよかったと言って
処置してくれ、ここの救急治療室の若い先生の処置で悪化したと言っても院長先生の反応はなかった。
その後回復し病院の処置の仕方に大きな疑問をもった。

38、蚊より二度目のプレゼント

最後の晩餐のおにぎりときつねうどんの夢から一年が過ぎたころ、私と技術者ピア・イヴォンの二人が高熱を出した。二人ともマラリヤと思い体に毛布をかぶって別々の車で病院へ走った。

ピア・イヴォンは私より一時間程遅れて病院へたどり着いた。どうも意識がもうろうとして道路わきの何かにぶつかったとの事で怪我がなく幸いであった。
二人ともすぐ入院、血液検査後マラリヤと判明し１０日間の薬の副作用との戦いが始まった。

私は体力も有ったので耐えられたが、ピア・イヴォンは小柄な人で幻覚がでていつも何か言いながら病室を歩き回り徘徊が続いた。
ピア・イヴォンは初めてで相当苦しい戦いだったのだろう。
薬の怖さから二度と掛かりたくないマラリヤに二度もかかってしまった。

39、にわか産婆

夜中の事である。
技術者ピア・イヴォンが深夜車で池を見回っているときに、コンテ川沿いで助けを求めるフランス人夫婦を見つけ住宅へ連れて来て、私に「アリオカ、アリオカ早く来てくれ」と声かけられ飛び起きて階下へ行くとフランス人夫婦がピア・イヴォンの居間に居た。

何が起きたかピア・イヴォンに尋ねると、この夫婦はコンテ川の上流に住んでいて奥さんが急に産気付き、船で川を下り病院へ行くところで、満潮で川の水が登りだしたために我々に助けを求めたとの話だった。
すぐベッドを用意し奥さんを休ませ、ピア・イヴォンにお医者さんを呼びに行ってもらった。

私と研修生フィリッペ一人が残りその間、何が有っても良い様に救急箱・タオル類を用意し、大きい鍋にお湯を沸かした。
我々も落ち着きたいのでコーヒーを入れご主人と飲んでいたら、奥さんの様子が変わりご主人に部屋へ呼ばれた。

生まれそうなので助けてくれと言われたが、私にできる訳がないと断るも強く言われるので奥さんの出産を手伝う覚悟を決め、下半身裸の奥さんのお尻にきれいなバスタオルを敷いて一点集中で待った。
奥さんが苦しそうに唸り破水が始まった。

救急箱を手元に置き手を消毒しバスタオルを持った。
頭が少し顔を出し始めたため両ももを広げ「頑張れ！頑張れ！」と声かける。
頭の中は真っ白でそう声かけるしかなかったのかもしれない。

一瞬逆子でなくて良かったと脳裏をかすめた。
するとするっと出そうになったので、タオルを両手に赤ちゃんを受け止める様にして再度声かけ生まれた赤ちゃんをタオルで受け止めた。

研修生フィリッペに鋏が無いため料理包丁を熱湯消毒させて用意し、へその緒を二箇所堅く結び包丁でへその緒を切断し、赤ちゃんをご主人に足をもって逆さにしてもらい背中を柔らかく叩いた。
すると赤ちゃんは産声を発したのでほっと胸をなでおろした。

39、にわか産婆2

そして赤ちゃんをバスタオルにくるみ、奥さんに渡した時の奥さんの達成した顔は何とも言えないほど美しく
見え、母親の神秘的な強さと美しさを見た。
しばらくして、救急車で女医さんが到着皆ほっとした。

女医さんは診察の後私に、「よくやったね」と温かいことばをかけてくれた。
そして「今度この様なことが有ったら決してへその緒を切らずについたまま温かくタオルでくるみ母親のもとで
医者の到着を待ちなさい。」

「衛生面で問題が起きることが有るよ」と優しく説明し夫婦を乗せた救急車は発った。
急に力が抜けそのままベッドに入ったが出産の光景が目から離れず眠れなかった。
冷静になって思うと何も医療資格が無いものがはたしてへその緒を切って良かったのか頭をよぎる。
女医さんが言いたかったことなのかもしれない。

数日後たまたま社長ピエールさんが県知事をバンガローに招待し私も一緒に食事をする機会があった。
県知事が「すごい」と褒めて、「養殖場の入口に産婆と立札を立てたら」と冗談を言われた。

県知事に「今回の様に助けを求められた場合、私にできないと断った場合は問題になるのですか」と質問したら
「求めを拒否しそれにより問題が発生した場合責任が問われる可能性が有る」との答えだったと記憶する。
その後何事もなかったので結果良しとしたい。

40、文明開化

自家発電で２４時間運転できる状況になって、生活は大きく改善された。
当然部屋は必要な時に明かりが灯せ、夜日誌を書いたり本を読んだり、好きな時に明るい中でシャワー、
水洗トイレが使用できる。

これだけでも生活は今までとは大きく違う。
冷蔵庫も２４時間使え、チルド品、冷凍品も安心して貯蔵できるので当然食生活も変わる。
それに加え共同で使用できる洗濯機、掃除機と一日にして文明開化である。
皆の気持ちも明かりが灯り明るくなったような気がした。

41、最高のスイーツ

ジャングルの文明開化で出来た人気のスイーツは冷凍完熟バナナである。
バナナが熟れると皮をむき、身をラップで包み冷凍する。
それを３時の休憩時に皆で食べる。
当然お金はかからない。

ブラジル人木こりペドロはそれから大きな房を常に運んできてくれるので、冷凍完熟バナナは切れることがなく
我々の贅沢な最高のスイーツとして皆に愛された。

42、何故だろう

貯水ダムの丘の裏側の堰が大雨で決壊しその
落ち込みに小さな池が出来た。
そこに体長１メートル強、幅１５センチメートルほどの
腹が赤い大うなぎが３匹程確認できた。

見ていると水面に時々浮いてくるので皆興味半分に
見ていたが、種類までは誰も判らなかった。
研修生のフィリッペが私の管理している二段銃を
借りに来たのでエビの天敵の鳥を脅すための
使用だと思い貸出た。

この落ち込んだ溜りに３匹の大うなぎを確認

カイエンヌへ出かけ夜家へ帰ったら入口の床に血が垂れているのに気付き上を見たら巨大ウナギの頭が吊る
されていた。
おどろきのあまり後ろへ飛びのいていた。
落ち着いて良く見たら切り取られた間違いなく巨大ウナギの頭であった。

翌日確認、フィリッペが巨大ウナギが浮いてくるのを待って銃で撃ち、取り上げて食べてみたが身は柔らかく
まずかった。
家の入口に吊るしたのは見せようと帰ってくるのを待ったが遅いので吊るしておいたと言ってくれた。
アナコンダの子供のフライ、今回の件私への不満を表したものかとチーフのピア・イヴォンに聞いてもはっきり
とはせず何故だろうの疑問のまま経過した出来事である。

43、強いフランス女性

フランス技術者２名ジャックリンとマリ・ジョが一緒に働いていたが、マリ・ジョは水質担当で昼１５時に全池のＰＨの測定を、夜中の３時には全池の溶存酸素を測定、もう一人のジャックリンは給餌管理担当で池ごとの給餌量算定、飼料管理を担当していた。

水質担当者は昼間は問題ないが、毎朝午前３時に全池７２池（池面積３７Ｈａ）を頭にヘッドライトを付け測定器を片手に池の中に入り測定する。
夜は特に危険で毒蛇、タランチュラ、カイマン、ジャガー等危険動物が活動する時間帯で有るから、最初の日に「一緒に回るよ」と声を掛けたが、「私の仕事だから一人でやれますから心配なく」との答えであった。
ひょっとしたら私が一番危険動物とおもわれたのかもしれない。

もう一人の給餌担当者は数が月に一回２０ｆｔ海上コンテイナーで１袋２０ｋｇが８００袋程運ばれてくる。
それを一人でコンテナから降ろしているので「皆で手伝うよ」と声かけたら、「結構です私の仕事ですから」と言って一人で最後までやり遂げていた。毎年契約更新時私の仕事内容はこれこれだから給料は幾らと言った感じの交渉で決められているので、自分の契約の内様にあれば自分の仕事として遂行する。
そうしなければ次年度の契約更新時に影響するからである。
どちらもアッパレとしか言い様がない。

44、新卒測量技師の恐るべき言葉

養殖用水貯水ダムを作るのに丘を挟んで二つのクリークをせき止めて堰を作る工事で、養殖池側の堰を最初に作り、その堰の高さを丘の向う側の堰の高さに移行する測定で、新卒測量士は丘を削ってくれ無ければ測定できないと私に行ってきたので、少しずつ移行しながら丘の向うまで行けば移行できるだろうと話しても納得してくれない。

私は測量は素人で有るが器具の使い方は教えて貰っていたのでブラジル人木こりペドロに棒を１００本程用意してもらい、ペドロと高さを移行して目印をつけながら、そこから移行先へと移行するの繰り返しで丘の向うのクリークへ堰の高さを移行することが出来た。
そのことを見ていた新卒測量士は次の日には仕事に来なかった。
新卒測量技師の気持ちを傷つけたようだ。

丘を挟んだ奥の堰

堰を作るため丘より土を運びせき止める

数日後クリークをせき止め堰を作る工事にかかり、工事終了後堰の水位が上がり両方の堰で水面からの高さを測定、問題ないことが判りペドロとともにほっと胸を撫でおろした。

45、愛犬３匹へのクレーム

ピア・イヴォンとエビの収穫効率のアップと歩留りに付いての打ち合わせの時、歩留りについて少し影響が有ると思われることはアリオカの３匹の犬が考えられる。
理由として、池の周りに３匹程の犬の足跡見られ、監視しているとその３匹が池の淵を歩いていて脱皮して淵に来ているエビを食べているのを確認したと話が出された。

どうも何時話しようかしまいか悩んでいた時の打ち合わせで、笑いながら話してくれた。
３匹は夜私のベッドの周りで寝ていて、朝になるとドッグフッドを食べ遊びに出かける。
見ていると池の周りを歩いていたり、養殖場の端のこんもり盛られた土の所で遊んでいる。
確かに脱皮エビを食べているのに違いない。

また、土を盛られたところは陸ガメが産卵した後で、どうもこれも食べているようだ。
３匹は夕方になると泥んこになってそろって帰ってくる。
３匹の歩留りのへの影響については、対応として食事を十分に与えると答えた。
２つ目のクレームは、インド系ガイアナ人が宿舎の裏に食用の為に鶏を飼っていてどうも犬に襲われて死んでいる。

その犯人は３匹の犬たち。
すぐ丈夫で高い囲いにして今度はアヒルのひなを買って放してやったり解決した。
３つ目は池の周りの雑草を刈り取る手間を省くために羊を３匹養殖場に放したが、これらが犬に襲われ死んでいる。

この件の犯人も３匹である。
狩りをしているつもりであろうがこれを止めることはできないので、山羊を飼う事をやめこれ以上悲惨な事件の再発防止に備えた。

46、愛犬３匹の生涯を語ろう

私が休暇で２週間程日本に帰ると、犬たちは毎朝一キロ程離れた本線道路からの入口に行って一日待ち
夕方家へ帰ってくる。
この行動を私が帰ってくるまで毎日続けたと皆が話してくれた。
野放しの野性っぽい３匹も忠犬なんだ。

最終的な帰国の時はエヤーフランスにて私達と一緒にパリ経由で日本へ連れてきた。
３匹にとってもかなり長旅だったろう。
その旅は亜熱帯のカイエンヌ空港からパリへ８時間、パリから大雪の成田へ１２時間程。そして２１日間の
検疫を経て成田から貨物トラックで羽田空港へ移動し、羽田空港からANAで鹿児島空港へ到着した。
我々は鹿児島空港でほぼ一か月ほどの長旅を終えた３匹を出迎え彼らは義理の両親と熊本にて
暮らすことになる。

成田空港での動物検疫で書類不備の為２週間ほど
のところを３週間かかったが、この時エヤーフランス
の方が書類の解決にお力添え頂いた結果である
ことは私たちは決して忘れることはない。

３匹は女房の実家の畑と納屋を高いフェンスで囲い、
フェンスの下は穴を掘って抜けださないよう３０ｃｍ程
コンクリートを打ち、入口は二重扉を付け野生化した
３匹に用意し、そこで生活して２匹は老衰で無くなり
波乱の生涯を全うしてくれたが１匹はストレスの
せいか病気で亡くなったが一緒に帰れて良かったと
振り返る。

３匹の名前は雄のマセリノ、雌のパロマとなぜか
ジャンゴで女房の実家の畑の栗の木下で仲良く
眠っている。

日本に来たフェンスの中のパロマ

47、社員によるエビの現地販売

資金繰りが悪く給料が払えないために輸出出来ないオニテナガエビのソフトシェル（脱皮直後の柔らエビ）を
社員が地元で販売、現金収入を得て給料を支払った。
皆一生懸命で、少しずつ口コミで広まっていった。

或る午後の日、巡回かの帰りなのか憲兵の装甲車が養殖場へ下りて来たのでびっくりして見ていたら
憲兵の方がクーラーを片手に装甲車から降りてきて、エビを売って欲しいとの事に二度びっくり。
今晩パーティーを開くらしく寄ってくれたことに、ここまで噂が広まっていたのか皆の努力に感謝した。

48、忘れられないロティの味

インド系ガイアナ人ナイポールは愛犬の犠牲になった鶏の代わりにアヒルのひなを飼うように
渡したからか、大きくなったのでカレーをして食べようと私の宿舎にやって来て料理してくれた。

彼らが作ってくれたのがロティで生地にバターを塗り
綿棒で伸ばしまたバターを塗りこみ伸ばすという
行程を何度も繰り返す。
パイ生地を作る要領の様に思える。

それを直径２０ｃｍほどに丸く伸ばし、彼らが鉄板で
作ったロティパンにて焼く。
アヒル入りカレーを焼きあがったロティに包んで
食べるのだがその美味しさは決して忘れられない
料理の一つで有る。

私の住むトレーラーハウスのキッチン
でロティを作ってくれた

49、忘れられない味その二

私が宿舎で良く食べていたのがフレンチギアナ風ペッパー・シュリンプで大変好きなエビの食べ方である。
池から漁獲されたエビで脱皮したあとの状態で柔らすなわちソフトシェルシュリンプを使用し料理する。

そのレシピを述べると
２人前
材料
有頭オニテナガエビソフトシェル　６尾（背ワタを取る）
塩・胡椒敵宜
シトロン果汁１から２個分
オリーブオイルカップ1/2程度

作り方
エビに塩、胡椒を多めにまぶししばらく置いておく
オリーブオイル1/2カップを中華鍋に入れ熱したら下ごしらえしたエビを入れ揚げる状態にて焼く
焼きあがったら強火のままシトロン果汁を回し入れ鍋のオリーブオイルとなじませる

味を観たうえ塩、胡椒、シトロン果汁で味の調整を行い仕上げる
出来上がったらプレートにご飯をつぎエビ３尾に中華鍋に残るソースをエビとご飯にかけ食べるが
中々の味である
無頭バナメイエビでも十分美味しく味わえるトロピカルな料理で忘れられない味の一つである。

50、忘れられない味その三

オニテナガエビ料理で美味しく味わった好きな料理の一つでオニテナガエビエビのエスカルゴバター
焼きも忘れられないジャングルでの味である。
５人分
材料
Ｌサイズ以上の有頭オニテナガエビ５匹背開き背腸を取り準備、エスカルゴバター（大さじ５杯）、
パン粉（適宜）
エスカルゴバターの材料

無塩バター２００ｇ、マッシュルーム７０ｇ、にんにく２５ｇ、エシャロット３０ｇ、アーモンド粉又は刻んだ
木の実１０ｇ、パセリ３０ｇ、塩７ｇブランデーか白ワイン５０ＣＣ弱、レモン汁半個分、コショウ適宜
バターを室温で柔らかくしておく

51、エスカルゴバターの作り方

１．マッシュルーム、にんにく、エシャロット、パセリは出来るだけ細かいみじん切りにする
２．鍋にバター（分量外）を適宜入れ、弱火でエシャロットを炒める
バターを吸ったらマッシュルーム、にんにくの順に合わせて行く
香りが立ったらブランデーかワインを注ぎ掻き混ぜながら水分を飛ばす
３．バターにパセリ、コショウ、アーモンド粉、塩、レモン汁を加えて良く混ぜ合わせ
粗熱の取れた2.を混ぜ合わせる
冷蔵庫で保管可能

作り方
背開きしたエビの身にエスカルゴバターを塗る
エビ５匹に終えたらパン粉を振る
オーブンで焼き目が付くまで数分焼く

日本ではオニテナガエビが中々手に入らないし大き目の海エビにしても効果で容易く食べられない

52、悲しい出来事

ハイチ人長老ルディの死
私が赴任して２年半ほどして大きな事故が発生した。
正午に近い時間だったと思うが、ハイチ人調理担当のレネがルディが見当たらないと言ってきた。
すぐ皆で心当たりを探していたら、宿舎の裏のポンプステーションへの水路の淵にルディのマッシェッテが落ちていると走って伝えてきた。

「すぐ泳げるものは水に入って探そう」と言って私は水に入り水深１．５ｍから２ｍほどで足で探っていった。
私の他誰も水に入ろうとしない。

１０分程して長老ルディの頭に足が当たり、潜ってシャツを掴みそのまま岸へ引っ張り上げた。
すぐ救急車と警察に連絡する様に伝え、長老ルディの脈を診たが無くすぐ人工呼吸を行った。
救急車が来るまで続けるのに誰も変わるものもなく遠回りに取り囲んで見ているだけである。

一時間程だったと思う救急車と警察が来てルディの死亡が確認され聞き取りが始まった。
内容は発見に至る経緯いと人工呼吸の開始から止めるまでの経緯を小まめに確認された。
ルディは宿舎の裏の草を刈っていて心臓発作で水路へ倒れたのが原因と後で聞かされた。
人の良い長老ルディの死は一番悲しい出来事であった。

53、訳ありの人が働くジャングル

赴任した当初は牧場並びに工事現場で住み込みで働いている人は不法滞在がほとんどであった。
徐々にパスポートを取らせ正常化していった。

年に一度は労働基準監督署から確認に来るが、申請できていない人はジャングルに隠れていた者もあった。
牧場に働くブラジル人牧童２人は良く私の宿舎の周りを馬で通り、女房が冷凍バナナをあげていた。

また、女房にお金を借りに来た時も貸してやると給料日の次の日にはきちっと返しに来ていた。
仔牛の親が死んだのでミルクをやってほしいと家に連れてきたので数日ベランダで面倒見たりした。

後で知らされゾ～としたが、どうも牛を殺して肉を販売していたことが判明し、またジャングルに来る前に人を殺めたとの情報もあり、ジャングルより出て行ってもらった。

ジャングルに住み働いている人たちに何事もなく胸をなでおろした出来事であったが、どうもジャングルで働く人が無いのが実情なのかもしれない。

牧童が連れてきた仔牛

54、ジャングルでもフランス

このジャングルで働く人はフランスの法律で守られている。
休暇は年間５週間はまとめてとっても良いし、次年度に累積することも可能のようだ。
最悪なのは６・７・８月のバカンス期間で本国もほとんど機能していない。

資材をたのんでもこの期間は何も来ない。
また、社員もまとめて休暇をとるので機能がマヒしてしまう。
私にとってはバカンス期間は厳しい期間であった。

池の注水口のパイプに魚卵等入らない様に直径２０ｃｍ、長さ５０ｃｍのメッシュの袋をかぶせ設置するが
注文したフィルターの完成品が来ないために確認したら、バカンスで９月過ぎでないと届かないとの返答に
女房が緊急に５０個程作ってくれた。

人手が足らないと孵化場、エビの加工にも女房が手伝ってくれたのでこの様な問題も乗り越えられたと
女房には感謝している。

55、現地の歯医者さん

虫歯が痛みピエールさんに紹介いただいた歯医者さんへ行くが、途中で一か月の休暇と言うことで
歯医者さんは休診。
私は海外に行くときは何時も正露丸を持って行った。
この時もそうで、歯医者休診時に歯が痛くなったときは正露丸を痛む歯に詰めてしのげ、正露丸
の必要性を感じた正露丸との出会いであった。

56、金鉱へ

１９８６年のある日、ピエール社長夫妻に誘われて関連会社の金掘削現場へ掘削した金を受け取りにいった。

ベースキャンプは、スリナムとの国境を流れるマロニ川を映画パピヨンで最初に出てくる刑務所の有った町で、カイエンヌから東西に約１５０Km程のサンローランディマロニから大型船外機２台を搭載した木彫りのボートで８時間程さかのぼったマロニ川の支流に有った。

丁度その頃スリナムにてボスネガー（アフリカ系逃亡奴隷の子孫）》による暴動が有った後で、その兵士がマロニ川の上流に潜んでいて襲撃される危険性が有るとの情報がピエールさんより話された。

そこでピエールさんはフランスの国旗をボートに掲げ、護身用としてピエールさん所有のコルト４５？とウインチェスター銃の二挺を持参すると話してくれたが、私にはまだその緊張感はなかった。
出発の前日はピエールさんの家に泊り、当日早朝にサンローランディマロニに着くようカイエンヌ

船でマロニ川を上って金採掘現場へ
写真右ピエール夫人、筆者、会計担当役員

ベースキャンプにて右ピエールさんと筆者

56、金鉱へ2

サンローランディマロニにて掘削会社の会計
担当役員と合流し、ボートに乗船し上流に向け
出発した。
ボートは川を上るわけだからすごいスピード走って
いるように感じ心地良い気分を味わった。

上流に行くにつれ岩場が有り瀬が多くなったが
ボートはどんどん上っていくのには驚きが有った。
今までボートで瀬を上るなど経験したことが無
かったからだ。

途中、フランス憲兵のボートとすれ違っただけで
ことなく夕方現地宿舎に着くことが出来た。
この金掘削会社はアメリカの会社との合弁会社で
ベースキャンプには３名のアメリカ人技術者が駐在
していた。
その夜はアメリカ人技術者がバーベキューで歓迎
してくれ楽しい夜を過ごせた。

次の日は、朝食後宿舎より３００m程上流にある
掘削船へモーターボートで向かう。
始めてみる掘削船でアメリカで作りここまで運んだ
との事、どのように運んだのか想像が着かない
ほど大変な道のりである。

これが欧米人のフロンティアスピリットなのかと
驚きと関心と不思議さが入り混じった。
掘削船は川底から砂金を吸い上げ水銀板の４枚
入った槽を水と一緒に通し、金を水銀に溶解させ、
パネルに付着させる仕組みとザクッと聞いた記憶
がある。

掘削船

パネルに付着しているの水銀と金の化合物
を削り取る筆者

56、金鉱へ3

そのパネルに付着した金を溶解させた水銀化合物
なのかを削り取りベースキャンプへ持ち帰えった。
明日早朝に帰るために一週間貯めた削り取った
水銀化合物を器に入れ小型溶解炉で溶解する。
最初に水銀が流れ出て残るのが金でそれを型に
入れて固める作業を見させてくれた。
これが金塊か。

初めて見た金塊は一週間の間、大の大人たちが
大変な思いで採集した血と汗の結晶で７００ｇ程
との事で、その時金額も教えてくれたが記憶にない。

１９８６年の金の平均相場を調べたら３６７．５９
US$/トロイオンス（３１．１０３５ｇ）この相場から
すると約２００万円で月間８４０万円弱。

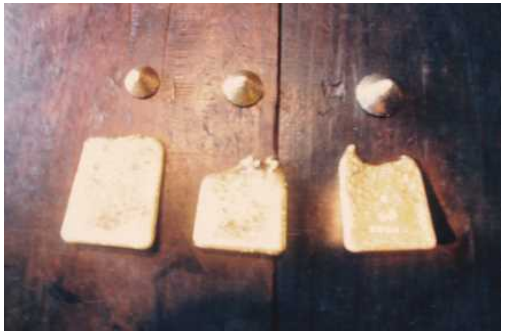
ピエールさんの構想は大きく、ベースキャンプの
対岸にジャングルを切り開き滑走路を作る工事を
していた。

古いダグラスDC-3型機を購入しベースキャンプと
カイエンヌ間の輸送機関として事業を拡大すると
話してくれた。

ピエールさんは夢を描き資金を集め実現していく
パワーとそのフロンティアスピリットには驚かされた。
私はそんなピエールさんが大好きで私の事を大変
気遣って頂いた。

砂金を調べる現地スタッフと、見ているだけの筆者

小型溶解炉で溶解水銀と金を分離し
最初に水銀が流れ、後に金が流れる


採集された金塊

57、フランスＴＶ局の取材

フレンチ　ガイアナの主な輸出産業は漁業（エビ）で約７５％を占めているからか、ＴＶ局がエビ漁業とエビの養殖の実態を取材にやってきた。
ピエールさんが主に説明し、有る場面で池の淵に呼ばれピエールさん、フランス人設計事務所の人、その横に私が立った状態でカメラが回され、我々がどのように放送されるのか楽しみでは有った。

放送日に皆でＴＶを見て、我々のオニテナガエビの養殖場はフランスでは一番大きな規模で、良く紹介された事は皆喜んだ。
でも、池の淵での３名のショットは私は映らず２名のショットで放送され、そうだよなここフランスだよねと変に納得するしかなかった。

58、ここに日本人は

休日の日だったと思うが私がショートパンツ一つに麦わら帽子、そして裸足でポンプ小屋でエンジンに軽油を
給油を給油していたら、一台のタクシーが養殖場の方へ下りてきたので何だろうと思いタクシーへ向かった。
タクシーから日本人の方が降りてきて私に「ここに日本人が居ると聞いてきたが」と英語で話されたので「私です」
と日本語で答えると、ちょっとビックリされた様子でエビの専門商社の方でカイエンヌへは海エビ（ギアナピンク）
の買い付けで来て、ここの養殖場に日本人が居ると聞いてやって来たと話をされ、訪問して頂き大変うれしく
なった。

でも私は日本人には見えなかったのだろう。色は真っ黒、裸で裸足日本人に見えることが不自然なのかも。
服をきちっと着ててもカイエンヌの町では「あなたはインディオだろう」といわれ、また、テキサス州の飛行機内で
隣の席のテキサスおばーちゃんに「あなたメキシコ人」といわれるた。
今まで日本人・中国人や韓国人など言われたことがないが、どうも中南米のインディオ系に見られることが多い。
日本人もインディオの人たちもお尻に蒙古斑のある同じモンゴロイドなので、ここでもまー良いかとなってしまう。

59、ＶＩＰな訪問者の温かい言葉

ピエールさんからフランスの首相で経済・財政相を兼務されたレイモン・バール氏が視察におみえになると聞いてはいたが、あまり緊張感はなかった。
空軍のヘリコプターで視察にお見えるとの事で、ヘリポートではないが着陸地点は養殖場の中を東西に走る幅６ｍ程のメイン道路が有るが、その西端に決められた。
しばらくしてヘリコプターの大きなエンジン音がして池の上を２機のヘリコプターが旋回し予定の道路に着陸、私もピエールさんと出迎えるとボディガードと秘書そして新聞記者をつれての視察、その重々しさに圧倒されてしまった。

また、女性秘書の女優さんかとも思われる美しさに目が点になってしまう。
レイモン・バール氏を中心にピエールさんと一緒に大きな人の塊で移動視察されたが、後でピエールさんに紹介され挨拶、「日本のどこの出身か」との質問に「私は九州熊本の生まれです」と答えると「私は福岡を訪れたことがある。ここまで良く頑張ってくれました」と労いの言葉を頂き、１分ほどではあるが今までの辛さが吹っ飛んでしまい感動を得た私にとって日本に居てはありえない出会いである。

空軍ヘリコプターで到着したレイモンバール氏
（中央）を案内するピエールさん（その左）

右から２番目レイモン・バール氏、３番目ピエールさん
４番目金鉱会社会計担当役員、右端が私

60、ピエールさんの死

１９８８年にピエールさんはがんを患って亡くなってしまった。
亡くなったと聞きすぐ公立病院へ行きお顔を見てたくさんの事が脳裏に浮かび上がってきた。
何時もイサトシ！イサトシ！と呼んで気遣ってくれたピエールさん。壮大な夢を語ってくれた開拓者精神旺盛な
ピエールさん。

そして、私が休暇で帰国するとき夫婦一緒にロスアンゼルス経由でハワイへよりハワイ大学、養殖場を視察、、
ロスアンゼルス空港では日頃裸足の私が靴を履いていたために足が痛くて歩けなくなり靴を脱いで裸足で
ホノルル行の飛行機乗継、ホノルルで一緒にズックを買いに行った思い出。

ハワイから日本へ行き私の熊本の実家へ一週間程滞在し、霧島、鹿児島を観光で回った思い出。
ピエール夫妻の帰国に際し東京へ、東京では私の会社を訪問し再度の融資を申し入れ、さらにＯＤＡへ行き
融資をお願いしたが親会社の保証が有ればとの事で、親会社へ行って門前にフランスと日本国旗を掲げて
あるのを見て、ピエールさんと私二人で海外管掌役員、部課長４名の方々との融資交渉。

交渉を終え会議室を出るときにある部長より有岡君きみみたいな一匹オオカミ的な人は日本の会社には受け
入れられないよと話された言葉は何故かずーと心に残っている３９歳ころの思い出。
休日の多くはお昼養殖場の近くのバンガローに呼んでくれ来客と一緒に食事を頂いた思い出等等、
ピエールさんは現地の父親みたいな方で私にとって大きな出会いである。

61、出会いが人生を変える

私はここに５年弱という短い期間では有るが、ここでしか出会えない貴重な経験が私を育て現在の私が有るのだと
出会いに感謝している。
人それぞれ出会いは違うが、その出会いで人生が左右されることが多い。
良い出会いにするのは自分自身であり、自分に於かれた環境で誠心誠意努力することにより次の出会いがあり
良い方向へ導かれると今感じている。